飯能市立博物館
Hanno Municipal Museum

天覧山の「ひっつきむし」

飯能市立博物館 学芸職員 岸 裕介

写真①　キンミズヒキの実

写真②　ヌスビトハギの実

写真③　チヂミザサの小穂

秋、散歩や低山ハイキングにちょうどよい気候ですね。でも、ちょっと草むらを通ると大変、服や靴がタネまみれになってしまいました。これは「ひっつきむし」または「くっつきむし」ともよばれる植物の種子や実など（ここでは総称してタネとよぶ）です。付くと取るのが大変なので嫌がられることの多いひっつきむしですが、ひとつひとつをよく観察すると、ひっつくためのいろいろな工夫が見えてきます。ここでは秋の天覧山でタネまみれになること間違いなしのひっつきむしを紹介します。

写真①のキンミズヒキは、円錐型のタネの底面にカギ針がびっしり並んでいて、これで毛や繊維にひっつきます。写真②のヌスビトハギは、とても小さなフックが一面に広がっています。これは面ファスナーと同じ働きをするので服に付くとなかなか剥がれません。写真③のチヂミザサは、長い棒のような芒（のぎ）に付着した粘液でひっつきます。光に反射した粘液が写真でわかりますでしょうか。この他にも、ヘアピン型の構造でひっつくイノコヅチや、返しのあるトゲでひっつくササクサやセンダングサの仲間も大変特徴的です。顕微鏡や高価なカメラでなくてもスマートフォンのカメラと 100 円ショップのマクロレンズの組み合わせで細部を観察することができます（写真①）。ぜひお試しください。

植物は生えているところから動くことはできませんが、タネのときは移動することができます。親とは違う土地へ、もっと環境のよい土地へ、植物は分布を広げるために、風に乗ったり、雨や水を利用したり、バネの力ではじけ飛んだり、動物に食べてもらったりといろいろな移動方法を生み出しました。

ひっつきむしのように動物にひっついて運んでもらう方法を付着散布といいます。甘い果実や脂肪豊富な実などの高いコストをかけず、カギ針や粘液などをタネのまわりに付けておくだけなので、植物にとって低コストの散布方法です。動物のうち体が大きくて移動力があり、毛皮に覆われた中～大型のほ乳類を主な運び屋としているので、その動物の体の届く高さにタネをひっつける必要があります。そのため、ひっつきむしとなるタネは木ではなく草に限られるようです。ほどよい付着力でしばらくすると自然に落ちるひっつきむしもあれば、強力な付着力で動物が毛繕いするところまで運んでもらうものもあります。風や水による散布よりも、親が育った環境に近いところに運ばれることを狙っているのかもしれません。

【参考文献】
北川尚史監修　『フィールド版 ひっつきむしの図鑑』　トンボ出版　平成 21（2009）年 9 月
多田多恵子　『身近な植物に発見！種子たちの知恵』　NHK 出版　平成 20（2008）年 5 月
多田多恵子　『身近な草木の実とタネ ハンドブック』　文一総合出版　平成 22（2010）年 9 月
鷲谷いづみ・埴沙萠　『タネはどこからきたか？』　山と渓谷社　平成 14（2002）年 3 月